副詞「ヒトヘニ」の用法と文体

胡　鴻　洋

問題の所在

古代副詞「ヒトヘニ」は興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』に二例、『源氏物語』に二四例用いられており、築島裕（一九六三）によって情態副詞の「C源氏物語にも見える」という項目に分類されている。「A源氏物語に見えない」「B源氏物語に見えるが、用法が限定されている」という訓点特有語とされる項目に分類されていない点から、築島裕がこの語を『源氏物語』の基礎語彙の一つとしていることが読み取れる。しかし、「ヒトヘニ」は平安初期の訓点資料に見られる一方、上代の和歌、宣命、祝詞に見えず、平安時代に入っても、初期の物語・日記類に見られず、中後期の作品『蜻蛉日記』に二例、『落窪物語』に四例、『源氏物語』に二四例を見いだすことができる。八代集においても、平安中期以降の作品『拾遺和歌集』に二例、『金葉和歌集』に一例、計三例しか見られない。[1]

このように、「ヒトヘニ」は平安中期以降の物語・日記に定着した語のようである。菊池由紀子（一九八三）は「モッパラ」の類語として「ヒトヘニ」を取り上げて、平安和文の「ヒトヘニ」は「モッパラ」と同様、男性を中心に、特殊な状況にある一部の女性に用いられた語であると指摘していることを合わせて考えると、「ヒトヘニ」の例は平安中期までの物語・日記類に見られないのは単なる偶然でなく、この語は漢文訓読によって成立し、和文にも影響を与えた語である可能性が高い。本稿では、訓点資料、和文、和漢混淆文における「ヒトヘニ」の用法を考察し、その意味用法や文体的性格を明らかにする。[2]

一　訓点資料における「ヒトヘニ」

「ヒトヘニ」が漢文訓読によって成り立った語であれば、漢文から用法を継承する可能性が高い。そのために、本節では、訓点資料において「ヒトヘニ」がどのような用法でどのような文脈に用いられたのかを確認する。なお、本稿では、「ヒトヘニ」の意味用法の分類は、『角川古語大辞典』に従い、その用法を「もっぱらその行為に徹する様」「もっぱらその状態である様」「事の原因や目的がもっぱらそれに拠っている様」の三つに分ける。

【表1】は『訓点語彙集成』より「ヒトヘニ」訓の付された漢字を抽出したものである。これによると、訓点資料において、「ヒトヘニ」訓の付された漢字として、「偏」計二四例、「徧」計一三例、「単」計四例、「片」計一例が見られる。そのうち、「徧」の全一三例は、石山寺蔵本『法華経義疏』長保四年点に集中している。大正新脩大藏経本によると、該当箇所は全部「偏」であることから、「徧」の例は仏典書写の個性による特別のものと見なし、「偏」と合わせて扱うことにする。次に先に挙げた三用法について訓点資料の訓読文との関わりを確認しておく。

一―一　「もっぱらその行為に徹する様」の用法

「もっぱらその行為に徹する様」の「ヒトヘニ」は計二一例であり、付訓された漢字として、「偏（徧九例を含む）」一六例、「単」四例、「片」一例が見られる。「片」「単」の例はそれぞれ平安中期、平安後期の訓点資料のみに現れるのに対して、「偏」の例は、平安初期から後期にかけて訓点資料に幅広く見られる。また、この四字の本来の用法は、『説文』によると、次の通りである。「偏」について、『説文』に「偏、頗也」とあり、段玉裁は「頗、頭偏也」と注を施している。つまり、「偏」は本来、物が真ん中から片方に偏ることを表す字である。「単」は「引伸爲双之反対」という段玉裁の注のように、本来、「双」に対する一つの意を表している。「徧」は『説文』に「徧、帀也」とあるように、周囲の意であるが、本稿の訓読例では全て「偏」の異体字で用いられている。「片」は、「謂一分為二之木片」という段玉裁の注のように、両物のなかの一つを指すものである。

①俱時に歎（き）て曰（は）ク、我が弟は貌端厳にして、父母に偏に愛念（せら）レツ（西大寺本金光明最勝王経巻一〇平安初期点）

②彼（の）時に（し）て、専求（し）普習（し）て行を行ジ果を證すること能（は）未。但、総相をのみ知（り）、片（ヒトヘ）〔に〕少

【表1】訓点資料における「ヒトヘニ」

用法＼資料名		石山寺蔵大乗大集地蔵十輪経元慶七年点	西大寺本金光明最勝王経平安初期点	石山寺蔵法華経玄賛淳祐古点	石山寺蔵法華経義疏長保四年点	高野山光明院蔵蘇悉地羯羅経寛弘五年点	西大寺本不空羂索神呪心経寛徳二年点	高山寺蔵大毘盧遮那成仏経疏永保点	龍光院蔵妙法蓮華経平安後期点	南海寄帰内法伝平安後期点 天理大学図書館・京都国立博物館蔵	東大寺図書館蔵本法華文句平安後期点	興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝承徳三年点	高山寺蔵本大毘盧遮那経疏巻第二康和点	高山寺蔵荘子乙巻南北朝期点	計	
もっぱらその行為に徹する様		0	1（偏1）	2（偏1 片1）	9（偏9）	1（単1）	0	3（偏2 単1）	0	1（単1）	1（単1）	2（偏2）	1（偏1）	0	21	
もっぱらその状態である様	動詞	1（偏1）	5（偏5）	0	2（偏2）	0	1（偏1）	0	5（偏5）	1（偏1）	0	0	0	1（偏1）	16	20
	形容	0	1（偏1）	0	1（偏1）	0	0	1（偏1）	0	0	0	0	0	0	3	
	形動	0	0	0	0	0	0	1（偏1）	0	0	0	0	0	0	1	
事の原因や目的はもっぱらそれに拠っている様		0	0	0	1（偏1）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
計		1	7	2	13	1	1	5	5	2	1	2	1	1	42	

注：「もっぱらその状態である様」列では，「動詞」「形容」「形動」はそれぞれ「偏」の共起語が「動詞」「形容詞」「形容動詞」であることを示している。括弧内は「ヒトヘニ」と訓まれる漢字及びその用例数を示している。

（し）の教を聴（き）て微少の因を修す（石山寺蔵法華経玄賛巻第六淳祐古点）

③問、何（が）故か二の光を牒する〔耶〕……問、何故（か）此の文は偏（へ）に一光をのみ嘆ずる（石山寺蔵法華経義疏序品末長保四年点）

④……色の浅-深（を）量（り）て、要す而も事を省け。或（るい）は復（た）単に（ひとへに）棘心を用（ゐ）る。或（るいは）赤土・赤石、或（るいは）棠梨・土紫をもて、一（た）ひ染（め）ツレハ破ルヽマテに至る（天理大学図書館・京都国立博物館蔵南海寄帰内法伝巻二平安後期点）

①は「偏」の字を訓読した例であり、「（兄弟のうち、）父母に弟のみが愛される」という意味である。②は「片」を訓読した例であり、「あの時、すべての仏法を学ぶことができないが、そのうちの「少教」のみを聞くことができる」という意味である。③は「偏」の字を訓読した例であり、「（二光のうち、）なぜこの文は一光のみを嘆く」という意味である。④は「単」の字を訓読した例であり、出家の衣服の色の染料を「棘心」「赤土・赤石」「棠梨・土

紫」のような複数のものを用いるわけでなく、「棘心」のみを用いるべきである文脈である。この例は「（三種類の染料の中から）棘心のみを用いる（べきである）」という意味である。

以上、「ヒトヘニ」訓の付された漢字「偏（徧）」「単」「片」は本来の用法が異なるが、訓点資料において、「複数の対象の中からある対象に限定して動作を実施する」文脈で用いられる点で共通している。その内、「偏」は、前述したように、「物が真ん中から片方に偏る」意を表すものである。「物が真ん中から完全に片方に偏る過程」は「もっぱらその行為に徹する様」の用法に繋がると考えられる。「偏」の付訓例は時代幅が最も広く、用例数が最も多いという事実を合わせて考えると、「もっぱらその行為に徹する様」の「ヒトヘニ」の成立は「偏」と最も関係していると考えられる。

一―二　「もっぱらその状態である様」の用法

「もっぱらその状態である様」の「ヒトヘニ」は、【表1】に示したように、「偏（徧）」字に付訓された二〇例である。この用法の「偏（徧）」の例は平安初期から南北朝にかけて訓点資料に幅広く見られる。「ヒトヘニ」と共起する語として、動詞一六例、形容詞三例、形容動詞一例が見られる。また、「偏」は「物が真ん中から片方に偏ることを表す」という本来の用法のほか、『古代漢語虚詞詞典』（一九九九）に「用在動詞、形容詞謂語前、表示状態比通常突出（動詞、形容詞という述語の前に用いられ、物事の状態が通常より目立っていることを表す）」とあるように、状態の強さを表すことにも用いられる。

⑤偏に一の肩を袒（に）セ（り）（石山寺蔵本大乗大集地蔵十輪経序品第一元慶七年点）

⑥放光、徧（へ）に広（し）（石山寺蔵本法華経義疏序品末長保四年点）

⑤は状態を表す動詞「袒にする」と共起する「ヒトヘニ」の例であり、「片方の肩を全く露わにする」という意である。⑥は形容詞「広シ」と共起する「ヒトヘニ」の例であり、「放した光は非常に広い」という意である。

以上、「ヒトヘニ」全二〇例はすべて「偏（徧）」の訓読に見られる。その用例の時代は幅広く見られる。「偏」に状態の強さを表現する用法が見られることから、「もっぱらその状態である様」の「ヒトヘニ」の成立は「偏」と最も関係すると考えられる。

一―三　「事の原因や目的がもっぱらそれに拠っている様」の用法

「事の原因や目的がもっぱらそれに拠っている様」の「ヒトヘニ」は【表1】に示したように、「偏（実例「偏」のみ）」一例のみであ

る。和漢混淆文において仏教的用法として多く見られるために、一類として立てておく。

⑦十方の法会に多（く）開発の〔之〕端為（た）り。故に偏に文殊に因するなり〔也〕（石山寺蔵本法華経義疏序品初長保四年点）

⑦は「十方の法会の多くはあちらこちら仏法を広げるものであるために、もっぱら（遊方菩薩である）文殊に依っている」という意であり、事の原因がもっぱらそれに拠っていることを表している。

「事の原因や目的がもっぱらそれに拠っている様」の用法は「もっぱらその状態である様」の用法の下位分類とも言える。このように、「事の原因や目的がもっぱらそれに拠っている様」の「ヒトヘニ」の成立は「もっぱらその状態である様」のそれと同じく、「偏」と最も関係すると考えられる。

一―四　訓点資料の用例のまとめ

以上、『角川古語大辞典』に「ヒトヘニ」の用法として指摘している「もっぱらその行為に徹する様」「もっぱらその状態である様」「事の原因や目的がもっぱらそれに拠っている様」のいずれの用法も仏典を主とする訓点資料に見られ、かつ「偏」と最も関わることを明らかにした。

この「偏」の用法は日本人の漢文にも直接的に影響をしていることが窺える。すなわち、日本漢文資料では、最明寺本『往生要集』平安後期点における「偏」全一四例のうち、送仮名「ニ」の付されている一三例は「ヒトヘニ」を表現した例と思われる。高野山西南院蔵本『和泉往來』文治二年点において、「ヒトヘニ」訓の付されている「偏」が一例見られる。東寺観智院旧蔵本『作文大躰』鎌倉中期点、身延山久遠寺蔵『本朝文粋』建治二年点において、送仮名「ニ」の付された「偏」はそれぞれ一例確認できる。その一方、日本漢文資料においては、「偏」の字以外に「ヒトヘニ」と訓読する漢字の例は見られない。これらを踏まえると、日本人の漢文においても「偏（ヒトヘニ）」が定着していたと推察できる。

二　平安和文における「ヒトヘニ」

上代の資料において、『萬葉集』、『延喜式』祝詞、『台記』別記「中臣寿詞」などに副詞「ヒトヘニ」の例は見られない。名詞「ヒトヘ」は『萬葉集』一〇例、『日本書紀』歌謡一例が見られるが、その意味用法はいずれも平安和文に用いられる副詞「ヒトヘニ」の意味用法と異なっているため、副詞「ヒトヘニ」が日本語内部でできたものと考えにくい。【表2】に示したように、平安和文では、「ヒトヘニ」は『蜻蛉日記』など中期以後の作品に現れるようにな

【表２】平安和文における「ヒトヘニ」

用法＼作品名		竹取物語	土佐日記	大和物語	伊勢物語	平中物語	蜻蛉日記	落窪物語	うつほ物語	枕草子	和泉式部日記	源氏物語
もっぱらその行為に徹する様	会	0	0	0	0	0	1（A1）	2（A1C1）	0	0	0	11（A9C2）
	地	0	0	0	0	0	1（B1）	2（A1C1）	0	0	0	9（A9）
もっぱらその状態である様	会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3（動1形1形動1）
	地	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1（形1）
計		0	0	0	0	0	2	4	0	0	0	24

用法＼作品名		紫式部日記	堤中納言物語	夜の寝覚	更級日記	浜松中納言物語	狭衣物語	栄花物語	讃岐典侍日記	大鏡	とりかへばや物語	小計（%）	
もっぱらその行為に徹する様	会	0	0	2（A1B1）	0	4（A1B2C1）	6（A6）	0	0	0	5（A3B2）	31	82(83)（A66B9C7）
	地	0	1（A1）	11（A10C1）	1（A1）	15（A12B3）	5（A4C1）	3（A3）	0	0	3（A3）	51	
もっぱらその状態である様	会	0	0	1（形1）	0	2（形1形動1）	2（動1形11）	0	0	0	0	8	17(17)（動3形9形動5）
	地	0	0	2（動1形1）	1（形動1）	2（形2）	2（形動2）	0	0	0	1（形1）	9	
計		0	1	16	2	23	15	3	0	0	9	99	

注：会，地はそれぞれ和歌・心和文を含む会話文，地の文を表している。「もっぱらその行為に徹する様」の列では，A，B，Cはそれぞれ「ヒトヘニ」の共起語が「心理・感情に関する動詞」「心理・感情以外の動詞（神仏に関する）」「心理・感情以外の動詞（神仏に関しない）」であることを表している。「もっぱらその状態である様」の列では，動，形，形動はそれぞれ「ヒトヘニ」と共起する語が動詞，形容詞，形容動詞であることを表している。括弧内の数字はすべて「ヒトヘニ」の共起語の用例数を示している。

り、特に『源氏物語』『夜の寝覚』『浜松中納言物語』にそれぞれ二四例、一六例、一三例と比較的に多く見られる。「ヒトヘニ」は、平安中期以降、漢文の影響によって和文に定着するようになった語と推測される。

また、【表２】に示したように、平安和文の「ヒトヘニ」は調査全体では会話文に三九例、地の文に六〇例、計九九例見られる。その用法について、「事の原因や目的がもっぱらそれに拠っている様」の用法は見当たらず、「もっぱらその状態である様」の用法は計一七例であり、全用例数の一七％に止まるのに対して、「もっぱらその行為に徹する様」の用法は計八二例と多く見られ、全用例数の八三％

に上っている。すなわち、平安和文の「ヒトヘニ」は主に「もっぱらその行為に徹する様」の用法で用いていたことが知られる。

二―一　「もっぱらその行為に徹する様」の用法

「もっぱらその行為に徹する様」の「ヒトヘニ」は、会話文に三一例、地の文に五一例、計八二例ある。会話文のうち、話し手が女性の例は四例（『蜻蛉日記』道綱母、『源氏物語』命婦、女房、『夜の寝覚』寝覚の上各一例）、話し手が男性の例は二七例である（『落窪物語』中将、中納言各一例、『源氏物語』馬頭三例、源氏二例、朱雀院、夕霧、薫、中納言各一例、『夜の寝覚』宮の中将一例、『浜松中納言物語』中納言三例、大将殿一例、『狭衣物語』狭衣の君五例、嵯峨院一例、『とりかへばや物語』中納言二例、大将、宮、大納言各一例）。「ヒトヘニ」全八二例のうち、⑧⑨のように心理・感情に関する動詞（A）と共起する「ヒトヘニ」は計六六例と多く見られるが、⑩のように心理・感情以外の動詞（神仏に関する）（B）と共起する「ヒトヘニ」は計九例、⑪のように心理・感情以外の動詞（神仏に関しない）（C）と共起する「ヒトヘニ」は計七例しかない。

⑧上に参りたまふを見るに、いと腹立たしう安からず、若き心地にはひとへにものぞおぼえける。　（地）『源氏物語』竹河

⑨（寝覚の上）我は立ち離れ、ひとへに忍び、言の葉ばかりをかはししほどのあはれ、浅くおぼえ給し人かは。　（会）『夜の寝覚』巻五

⑩（道綱母）……神をひとへに頼む身なれば　（和歌）『蜻蛉日記』下巻

⑪三の君の御許に、ひとへにうち頼みたてまつる。　（地）『落窪物語』巻之一

⑧「（侍従の君は）腹立たしく気持ちが収まらず、若気の一途に物事をひたすら思っているのであった」という意味（A）である。⑨は寝覚の上の心話文であり、出家すれば、内大臣との煩わしい男女関係から離すことができるが、「（老関白の妻の時、）自分が遠ざかり、（内大臣への思いを）ひたすら忍び、言葉だけを交わした頃のしみじみとした恋の情趣ははっきり覚えている」という内大臣に対する寝覚の上の矛盾している心理を描写する文脈（A）である。老関白は、『源氏物語』では、漢文訓読調の強い言葉遣いをする人物である。寝覚の上は老関白の妻として訓読語を使う可能性が考えられる。⑩は着物に書かれる和歌であり、「神様をひたすらお頼り申している身……」という意（B）である。この歌は、女性によって詠み上げられるものであるが、神社に奉納されるものなので、訓読語の用いられる可能性がある。⑪は「（侍女が）三の君の御元へ行って、

ひたすらお邸にいられるようにお頼み申し上げる」という意味（C）である。

また、注目すべきなのは、次の⑫のように、『源氏物語』に男性は女性のいる場面で、「偏」を含む漢詩を詠み上げる描写が見られる点である。

⑫いと見どころありてうつろひたるを、とりわきて折らせたまひて、（匂宮）「花の中に偏に」と誦じたまひて……

（会）『源氏物語』宿木

この例は、中の君の前で匂宮が元稹の漢詩「不二是花中偏愛レ菊、此花開後更無レ花」を詠み上げる場面である。『和漢朗詠集』には、元稹の右の漢詩のほかに、白居易の漢詩「竹亭陰合偏宜レ夏、水襴風涼不レ待レ秋」も収録している。③『源氏物語』の作者である紫式部は、父が兄に史記を教授しているのを傍らで聞いて漢文知識を身につけたという事実に踏まえて、女性のいる場で男性が漢詩を詠み上げることで、その女性もその漢詩に親しくなり、漢詩に含まれる訓読語を使う可能性がある。

以上、「もっぱらその行為に徹する様」の「ヒトヘニ」は平安和文において、心理・感情に関する動詞と共起する傾向が強いことが分かる。このように、平安和文で心理・感情に偏る傾向は、訓点資料の同用法が「複数の対象のなかのある対象に限定して動作を実施する」文脈で用いているのとは異なっている。その要因は、後述するように、平安和文の「ヒトヘニ」は漢詩文の影響を強く受けていたためと考えられる。

二―二　「もっぱらその状態である様」の用法

「もっぱらその状態である様」の「ヒトヘニ」は会話文に八例、地の文に九例、計一七例である。会話文のうち、女性が話し手である例は計一例（『源氏物語』中の君一例）、男性が話し手である例は計七例である（『源氏物語』馬頭一例、左大臣一例、『狭衣物語』狭衣二例、『夜の寝覚』中納言一例、『浜松中納言物語』大将殿一例、中納言一例）。また、【表2】に示したように、「もっぱらその状態である様」の「ヒトヘニ」と共起する語は動詞（否定語を伴う動詞も含む）計三例、形容詞計九例、形容動詞計五例である。

⑬（中の君）ひとへに知らぬ人ならば、あなものぐるほしとはしたなめさし放たんにもやすかるべきを……

（会）『源氏物語』宿木

⑭（内大臣）げにわれはいみじくわかくて、ひとへにもの慎しく、はづかしかりけんに……

（会）『夜の寝覚』巻三

⑮さし遣り給へるを、ねたがり腹立つさまも、ひとへに花やかなる人ざまにて、憎からず。

（地）『狭衣物語』巻四

⑬は動詞未然形「知らぬ」と共起する「ヒトヘニ」の例であり、話し手は⑫で挙げたように、「偏」を含む漢詩が詠み上げられるのを聞いた中の君である。この例は、昔から厚く世話をしてくれてきた薫に対する態度を変えると、周囲の疑惑を招いてしまうことを心配しているという、薫に対する中の君の矛盾している心理を描写する文脈であり、「まったく親しくない相手でしたら、なんと非常識だと突き放しやすいが……」という意味である。⑭は形容詞「慎ましい」と共起する例であり、話し手が貴族の内大臣であり、「（寝覚の上）ご自身もとても若くて、（何につけても）非常に遠慮深くて、恥ずかしかった……」という意味である。⑮は形容動詞「華やかなる」と共起する例であり、「権大納言が悔しがって怒っている様子も、非常に華やかな性格だから憎めない」という意味である。

このように、平安和文に見られる「ヒトヘニ」の「もっぱらその行為に徹する様」「もっぱらその状態である様」という二つの用法はいずれも仏典を主とする訓点資料にも見られる。しかし、「もっぱらその行為に徹する様」の「ヒトヘニ」は、仏典において、「複数の対象の中からある対象に限定して動作を実施する」文脈で用いられる一方、平安和文においては、主に感情・心理に関する動詞（A）を含む文脈で用いられているという相違点が見られる。このような相違点はどこに起因するのであろう。平安和文に漢籍の影響が強いと指摘されていることを考えると、漢籍の「偏」の影響を受けている可能性が高い。文淵閣『四庫全書』電子版から『白氏長慶集』の「偏」を含む詩句を調べると、「偏」が副詞で用いられる詩句全二九例のうち、心理・感情に関する動詞を後接する例は計一六例ある（「偏知」三例、「偏愛」二例、「偏好」二例、「偏怜」二例、「偏惜」「偏驚」「偏覚」「偏相憶」「偏慚」「偏憶」「偏惆悵」各一例）。その他、状態を表す動詞、あるいは、形容詞を後接する「偏」が計四例（「偏宜」二例、「偏相似」「（夜）偏長」各一例）見られる。これらの例のなかで、「偏覚」「偏知」はおそらく⑧のように「おぼゆ」と共起する「ヒトヘニ」、⑬のように「知らぬ」と共起する「ヒトヘニ」の使用に影響を与えた可能性が考えられる。このように、平安和文の「ヒトヘニ」の用法は漢籍から影響を深く受けていると推測される。

三　和漢混淆文における「ヒトヘニ」

一で述べたように漢文訓読においては、「偏」をはじめとする複数の漢字を「ヒトヘニ」によって訓読していた。日本語表現の世界では「ヒトヘニ」がどの漢字で表記されていたであろうか。和漢混淆文では、観智院本『三宝絵』の「ヒトヘニ」全五例中、漢字表記例（「偏ヘニ」）は一例見られる。延慶本『平家物語』の「ヒトヘ

【表3】和漢混交文における「ヒトヘニ」

用法＼作品名		十訓抄	方丈記	保元物語	平治物語	延慶本平家物語	覚一本平家物語	法華百座聞書抄	観智院本三宝絵	打聞集	沙石集	宇治拾遺物語	今昔 天竺震旦	今昔 本朝仏法	今昔 本朝世俗	今昔 小計	小計（%）	
もっぱらその行為に徹する様	会	3（A1 C2）	0	0	0	10（A3 B6 C1）	1（B1）	1（B1）	0	0	0	4（A1 B2 C1）	3（B3）	15（B15）	5（A1 B3 C1）	23	42	144(44)（A26 B103 C15）
	地	1（A1）	0	0	0	19（A9 B6 C4）	5（B4 C1）	2（B2）	5（A1 B2 C2）	0	11（A3 B7 C1）	3（A1 B2）	6（A1B5）	42（A1 B40 C1）	8（A3 B4 C1）	56	102	
もっぱらその状態である様	会	2（名2）	0	1（名1）	0	17（動8 名9）	8（動1 名7）	0	0	0	0	0	13（動3 名10）	16（動3 名13）	1（名1）	30	58	136(42)（動30 形11 名95）
	地	2（名2）	0	1（名1）	2（名2）	18（動3形5 名10）	10（形5 名5）	0	0	0	6（動1形1 名4）	3（動2 名1）	14（動2 名12）	18（動4 名14）	4（動3 名1）	36	78	
事の原因や目的がもっぱらそれに拠っている様	会	0	0	0	0	5（動原1 名原2 名目2）	1（名原1）	0	0	0	0	0	4（動原2 名目2）	16（動原8 名原7 名目1）	0	20	26	45(14)（動原20 名原16 名目9）
	地	0	0	0	0	2（動原1 名原1）	1（名目1）	0	0	0	4（動原3 名目1）	0	6（動原4 名原1 名目1）	5（動原1 名原3 名目1）	1（名原1）	12	19	
小計		8	0	2	2	71	26	3	5	0	21	10	46	112	19	177	325	

注：会，地はそれぞれ心和文を含む会話文，地の文を表している。「もっぱらその行為に徹する様」の列では，A，B，Cはそれぞれ「ヒトヘニ」の共起語が「心理・感情に関する動詞」「心理・感情以外の動詞（神仏に関する）」「心理・感情以外の動詞（神仏に関しない）」であることを表している。「もっぱらその状態である様」の列では，動，形，名はそれぞれ「ヒトヘニ」と共起する語が動詞，形容詞，名詞であることを表している。「事の原因や目的がもっぱらそれに拠っている様」の列では，動，名はそれぞれ「ヒトヘニ」と共起する語が動詞，名詞であることを示し，原，目はそれぞれ「ヒトヘニ」が事の原因，事の目的の用法で用いられていることを示している。括弧内の数字はすべて「ヒトヘニ」の共起語の用例数を示している。

ニ」全七一例中、漢字表記例（「偏ヘニ・偏ニ」）は六九例見られる。日本古典文学大系『今昔物語集』（以下、『今昔』と略称）の「ヒトヘニ」全一七七例はすべて「偏ニ」で表記されている。また、前田本三巻本『色葉字類抄』の「ヒトヘニ」の掲出字は「偏」のみである。このように、院政鎌倉時代では、「偏」は「ヒトヘニ」の表記として定着するようになったと言えるであろう。

【表3】に示したように、院政鎌倉時代の「ヒトヘニ」は調査全体では会話文に一二六例、地の文に一九九例、計三二五例であり、全用例数が九九例である平安和文より多く見られる。「ヒトヘニ」の用法について、「もっぱらその行為に徹する様」の用法の例は計一四四例と最も多く見られるが、全用例数に占める比率は四四％であり、平安和文の八三％より低い。「もっぱらその状態である様」

の用法の例はそれに次ぎ、計一三六例であり、全用例数に占める比率は四二％である。平安和文の一七％の二倍より高いということから、この用法は院政鎌倉時代に大きく発展していたことが推測できる。また、平安和文に見られない「事の原因や目的がもっぱらそれに拠っている様」の用法は計四五例見られ、全用例数の一四％を占めている。一で述べたように、仏典を主とする訓点資料では、「事の原因や目的がもっぱらそれに拠っている様」の例が見られることから、この用法は仏典の訓読によって院政鎌倉時代に用いられた可能性がある。これらの作品のうち、和漢混淆文の典型である『今昔』の「ヒトヘニ」は計一七七例であり、和漢混淆文全用例三二五例の半分を超えている。この一七七例のうち、本朝世俗部に計一九例しかないのに対して、天竺震旦部に四六例、本朝仏法部に一一二例、計一五八例と多く見られることは「ヒトヘニ」が漢文訓読調の強い語であることを示唆している。

三―一　「もっぱらその行為に徹する様」の用法

「もっぱらその行為に徹する様」の「ヒトヘニ」は会話文に四二例、地の文に一〇二例、計一四四例である。そのうち、次の⑯のように心理・感情に関する動詞（A）と共起する「ヒトヘニ」は計二六例、⑰のように心理・感情以外の動詞（神仏に関しない）（C）と共起する「ヒトヘニ」は計一五しかないのに対して、⑱のように心理・感情以外の動詞（神仏に関する）（B）と共起する「ヒトヘニ」は計一〇三例と多く見られる。「ヒトヘニ」と共起する動詞は全体的にBに傾いていることは、心理・感情に関する動詞（A）と共起しやすい平安和文の「ヒトヘニ」との相違点が見られる。

⑯偏ヘニ聞キツル事ヲノミ悦ビ奇ブ事、喩ヘバ年シ経テ母ヲ別レタル小コ牛ノ、風ノカニ母ノ音ヲ聞ナラムガ如シ。

（地）『三宝絵』上　雪山童子

⑰（孔子）ひとへに君に随ひ奉る、忠にあらず。

（会）『十訓抄』六ノ序

⑱王、天ノ言ヲ聞テ悲ビ喜テ云ク、『我ガ国ニハ偏ニ大乗ヲ流布シテ小乗ヲ不可留ズ』ト。

（会）『今昔』六ノ三一

出典：王聞二天語一、悲喜立レ制、我国偏重二大乗一、不レ可三流通二小法一。『三宝感応要略録』巻中　有レ人将読二華厳経一以レ水盥レ掌所レ霑虫類生レ天感応第一

⑯は、「聞いた声だけでひたすら喜ぶ様子は、長年、母に別れた子牛がほのかに母の声を聞きつけた（時の喜び方の）ようであった」という意味（A）である。⑰は「ひたすら主君に従うのは、忠義ではない」という意味（C）である。⑱は「我が国では大乗をひたすら広げて、小乗を広げてはいけない」という意味（B）である。この

例は『今昔』全一七七例のなかで出典に「偏」が見られる唯一の例であるが、その他の『今昔』の「ヒトヘニ」の例は撰者の個性文体を反映したものと推測できる。

三―二　「もっぱらその状態である様」の用法

「もっぱらその状態である様」の「ヒトヘニ」は会話文に五八例、地の文に七八例、計一三六例見られる。そのうち、平安和文に見られる形容動詞と共起する「ヒトヘニ」は和漢混淆文に見られない。平安和文に見られる、動詞（否定辞を伴う動詞も含む）、形容詞（接尾辞「ゴトシ」も含む）と共起する「ヒトヘニ」はそれぞれ三〇例、一一例しか見られないが、平安和文に見られない、名詞と共起する「ヒトヘニ」は九五例と多く見られる。「ヒトヘニ」と共起する名詞全九五例のうち、「事」「者」「所」のような形式名詞は計一一例、「威力」「恩」「徳」のような抽象名詞の例は計八二例、「人」「扇」のような実質名詞の例は計二例見られる。

⑲成順、偏ニ此ノ世ノ事ヲ不思ズシテ、只、後世菩提ヲ願。

（地）『今昔』巻一五ノ三五

⑳偏ニ神慮穴倉シ。

（地）『延慶本平家物語』第二中

㉑その罪をなだめ、軽めむこと、ひとへに徳政なるべし。

（地）『十訓抄』十ノ七十六

⑲は動詞と共起する「ヒトヘニ」の例であり、「成順は現世のことにまったく関心を持たず、後世の極楽往生のみを願う」という意味である。⑳は形容詞と共起する例であり、「天子の御心は非常にぼんやりしている」という意味である。㉑は名詞と共起する例であり、「その罪を宥恕し、軽減することはまさしく徳に基づく政治である」という意である。

三―三　「事の原因や目的がもっぱらそれに拠っている様」の用法

「事の原因や目的がもっぱらそれに拠っている様」の「ヒトヘニ」は会話文に二六例、地の文に一九例、計四五例である。㉒のように動詞「依る」と共起する「ヒトヘニ」の例は計二〇例あり、いずれも「事の原因がもっぱらそれに拠っている様」を表している。その一方、名詞と共起する例は計二五例ある。そのうち、名詞「故」と共起する「ヒトヘニ」は計一六例あり、㉓のように、いずれも「事の原因がもっぱらそれに拠っている様」を表している。名詞「為」と共起する「ヒトヘニ」は計九例あり、㉔のように、いずれも「事の目的がもっぱらそれに拠っている様」を表している。

㉒此レ偏ニ、観音ノ加護ニ依テ、此ノ難ヲ免レヌル也。

（会）『今昔』一六ノ一六

㉓此レ、偏ニ張良ト知音ト有シ故也。

（地）『今昔』一〇ノ三

㉔此レ偏ニ母ノ後世ヲ訪ハムガ為也。

（地）『今昔』一九ノ二八

㉒は「これはまったく観音のご加護によって危難を免れたのである」という意味である。㉓は「（鴻門の中では、項伯は今日、不祥事が生じてはならない旨を項羽に言い聞かせた。）これは、まったく（項伯と）張良と親友だからである」という意味である。㉔は「このことはまったく母の後世を弔おうがためのことであった」という意味である。一で述べたように、仏典を主とする訓点資料において、「事の原因や目的がもっぱらそれに拠っている様」の「ヒトヘニ」の例は一例しかないが、「偏依」「偏～故」「偏為」をキーワードとして大正新脩大藏経テキストデータベース（SAT2015）から検索してみると、漢訳仏典それぞれ一四、三例、九二例が見られる。④このように、「事の原因や目的がもっぱらそれに拠っている様」の用法はすべて仏典の訓読によって用いられたものである。

以上、和漢混淆文の「もっぱらその行為に徹する様」「もっぱらその状態である様」「事の原因や目的がもっぱらそれに拠っている様」のいずれの用法も仏典を主とする訓点資料に見られる。和漢混淆文の「ヒトヘニ」は仏典から影響を強く受けていると考えられる。

まとめ

本稿では、『角川古語大辞典』に従い、「ヒトヘニ」の用法を「もっぱらその行為に徹する様」「もっぱらその状態である様」「事の原因や目的はもっぱらそれによっている様」という三用法に分けて、訓点資料、和文、和漢混淆文の用法を考察した。以上から、次の諸点を指摘できる。

○訓点資料では、「もっぱらその行為に徹する様」「もっぱらその状態である様」「事の原因や目的がもっぱらそれに拠っている様」の三用法のいずれも見られ、和文や和漢混淆文の用法と対応している。

○和文の「ヒトヘニ」全九九例のうち、「もっぱらその行為に徹する様」の例は全用例数の八三％を占めており、特に「ヒトヘニ」は「心理・感情に関する動詞」と共起しやすい傾向が見られる。その裏に心理・感情に関する動詞を後接しやすい『白氏長慶集』の「偏」の影響が推測される。「もっぱらその状態である様」の例は動詞、形容詞、形容動詞と共起し、全用例数の一七％を占めている。「事の原因や目的がもっぱらそれに拠っている様」の用法は見られない。

○和漢混淆文の「ヒトヘニ」全三二五例のうち、「もっぱらその

行為に徹する様」の例は全用例数の四四％を占めており、主に「複数の対象の中からある対象に限定して動作を実施する」文脈で用いられる。「もっぱらその状態である様」の「ヒトヘニ」は動詞、形容詞、名詞と共起し、平安時代より発達し、全用例数の四二％に上っている。「事の原因や目的がもっぱらそれに拠っている様」の「ヒトヘニ」は名詞と動詞と共起し、全用例数の一四％を占めている。この用法は仏典によく見られる「偏依」「偏～故」「偏為」のような用語の直訳の影響を受けていると考えられる。

このように、「ヒトヘニ」は『源氏物語』に比較的に多く見られるが、漢文訓読によって生じて、和文や和漢混淆文で広く用いられた語である。「ヒトヘニ」のように、漢文訓読から由来し、和文に定着した語はほかにもあるが、今後の課題としたい。

注

① 『訓点語彙集成』によれば、「観弥勒上生兜率天経賛　巻下」（平安初期　第一次点）における「偏」は「ヒトヘニ」訓の附された最古の例である。

② 変体漢文における「ヒトヘニ」と漢文訓読との関わりは、別途で検討する。

③ 元稹、白居易の漢詩の加点は佐藤道生・柳澤良一著（二〇一一）『和歌文学大系　和漢朗詠集／新撰朗詠集』（明治書院）による。

④ 漢訳仏典における「偏依」「偏～故」「偏為」の例を挙げておく。

宋人等云、偏依二聖教之威力一也。『弘賛法華伝』宋招提寺釈慧紹宋廬山釈僧瑜

偏崇重レ佛、故造二陟屺止観二寺一。『法華伝記』斉太祖高帝十六若偏爲二良福田一施、不二楽常施一。『法苑珠林』慳僞部

調査資料（編者名・著者名は省く）

○電子テキスト：日本語歴史コーパス CHJ：『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』『大和物語』『平中物語』『蜻蛉日記』『落窪物語』『枕草子』『和泉式部日記』『源氏物語』『紫式部日記』『更級日記』『大鏡』『讃岐典侍日記』『堤中納言物語』『方丈記』『十訓抄』『宇治拾遺物語』／新編国歌大観 DVD-ROM：『拾遺和歌集』『金葉和歌集』『和漢朗詠集』／文淵閣『四庫全書』電子版：『白氏長慶集』／大正新脩大藏経テキストデータベース（SAT2015）○刊行本文、索引、影印本等：『浜松中納言物語総索引』『栄花物語本文と索引　自立語索引篇』『法華百座聞書抄総索引』『平治物語総索引』『保元物語総索引』（武蔵野書院）／『夜の寝覚総索引』（明治書院）／『宇津保物語本文と索引　索引篇』『狭衣物語語彙索引』『とりかへばや物語総索引』『今昔物語自立語索引』『三宝絵詞自立語索引』（笠間書院）／『平家物語総索引』（学習研究社）／『沙石集総索引：長慶十年古活字本』『延慶本平家物語索引篇』（勉誠社）／『打聞集の研究と総索引』（清文堂）／『平家物語総索引』（牧野出版）／『往生要集：最明寺本』『高野山西南院蔵本和泉往来総索引』『重要文化財本朝文粋』（汲古書院）／『平安詩文残篇』（八木書店）／『古点本の国語学的研究　訳文篇』（講談社）／『訓点資料の研究』（風間書房）／『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究　本文篇』（斯道文庫）／『高山寺古訓点資料　第二』『高山寺古訓点資料　第三』『興

福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究　訳文篇』（東京大学出版会）／『「法華文句」古点の国語学的研究：東大寺図書館蔵本』（桜楓社）／「西大寺本不空羂索神呪心経寛徳点の研究　釈文と索引」（『国語学』33号）／「高野山光明院所蔵蘇悉地羯羅経のヲコト点」（『訓点語と訓点資料』1号）／「高山寺蔵本大毘盧遮那経疏巻第二康和5年点訳文（2）」（『訓点語と訓点資料』104号）

【参考文献】

築島裕（一九六三）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会、332頁、795頁

菊池由紀子（一九八三）「もっぱら」（佐藤喜代治編『講座日本語の語彙　語誌Ⅲ』明治書院所収、294–300頁）

中国社会科学院語言研究所古代漢語研究室編（一九九九）『古代漢語虚詞詞典』商務印書館、399頁

中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編（二〇一二）『角川古語大辞典巻五』角川学芸出版